

編集後記

2022年9月、第1回研究大会を開催した。詳細は本号掲載の記録をご参照いただきたいが、予想をはるかに上回る参加があり、書籍展示のお申し出までいただいた。その理由はいろいろ考えられるが、少なくとも報告がきちんと準備されたものだったことも大きいはずだ。個人報告は何度か準備会を開催しブラッシュアップしており、パネル報告も個人報告の寄せ集めではなく、きちんと打ち合わせされ構想されたものだったと思う。報告者各位、そして書籍展示をしてくださった琥珀書房の山本捷馬さんに感謝申し上げます。ここまでうまくはいかないと思うが、次回も引き締まった会になるよう委員一同努力したい。第2回大会は9月1日(金)に開催予定である。

『Antitled』第2号も、創刊号と同じくバラエティ豊かなものとなった。ありがたいことに、編集委員でない方々からの原稿も複数寄せられた。三橋論文は私から依頼し投稿してもらったのだが、全く自主的に投稿してくださった方々がいた。惜しくも掲載に結びつかなかったものもあるが、練り直して再投稿いただけるような体制を今後作っていききたい。

本誌は査読制度を設けているが、私自身は権威ある学術誌に論文を掲載することにそれほど拘りはない。権威誌への掲載が「効く」のは、学振研究員の採用審査くらいであり、それ以降はそれほど研究人生に影響はないと考えてきた。掲載媒体で論文の価値が決まるなど有り得ないことは、考えるまでもなく明らかだからである。そもそも日本史学界では、紀要の地位はそれほど低くなく、就職後は所属大学紀要にばかり執筆する者も多い。紀要に書かず査読誌にばかり投稿している者を「いつまでも中央を向いている」と批判する声すらきいたことがある。

にもかかわらず、本誌は査読誌とした。それは、査読は論文の質を直ちに保証せずとも、投稿者にとっては自身の論文を同業者に真剣に検討してもらえる機会であり、有益な査読は本人にとってやはり財産であると思うからである。先行研究の乏しい分野の論文査読は様々に難しく、こういった分野の研究者はなかなかこの機会を有効に使うことができない。諦めて査読のない媒体で自由に自説を展開することもひとつの手だが、私は、それは不安だった。なにせ書いている本人も初めての試みであったりするのだから、手探りであり、ぜひとも他人の意見をききたいのである。私と似た気持ちの研究者は結構いるのではないかと考えた。このような類の、査読制度の「恩恵」を受けることが相対的に少ない研究者に、専門性を十全に保証はできないにせよ、真剣にあなたの論文を読んでコメントしますよ、という態度で臨みたいと考えた。本誌の査読制度はそのようなものと考えていただければ幸いである。次号への多数の投稿をお待ちしています。(河原梓水)

Antitled vol. 2

2023年3月27日 発行

編集：『Antitled』編集委員会 発行：Antitled 友の会

編集委員：猪原透 河原梓水 田中誠 寺澤優 許智香 眞杉侑里

所在地：〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1 福岡女子大学国際文理学部 河原梓水研究室内

Tel: 092-661-2411(代)

E-mail: antitled2021@gmail.com

Website: <https://kihtty.org/>

オンライン ISSN 2436-7672